

令和 3 年 8 月 23 日現在

機関番号：33929

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00361

研究課題名(和文)冠柳3詞人による南渡前後の詞研究

研究課題名(英文)The study of Ci lyrics by three most significant "Guan Liu" poets before and after the fall of the North Song Dynasty

研究代表者

松尾 肇子 (MATSUO, Hatsuko)

東海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：20202319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、宋代に「冠柳」と称された三人の官僚詞人、王観・康与之・晁補之を取りあげ、柳永が開拓した修辞法の選択と展開の実相を明らかにした。また、王観についてはその詞の国外への伝播や寿詞を例とした芸能との接点など多様な視点から考察を加え、晁補之については当時発展した詩的技法の撰取と詞的変容を跡付け、康与之については浮沈の激しい彼の生涯をたどりつつ北宋末南宋初の複雑に変化した社会における歌辞文芸の役割を考察して、北宋中期から南宋初期にかけての官僚社会における雅詞の発展とその受容を多角的に解明した。その成果は論文及び訳注として公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

柳永は歌辞文芸の詞を飛躍的に発展させたが、放蕩に生きた前半生や俗語なども使用してリアルな人間を描いたことに批判も多い。しかし「冠柳」の評語はその柳永詞に追随した数多くの詞人が存在したことを示す。本研究でとりあげた王観・晁補之・康与之の三人の「冠柳」詞人は、浮沈の激しい官僚人生を送ったが、柳永の後を襲う詞によって士大夫社会で名声を得た。本研究は、雅詞の進展において柳永が残した各種の修辞技法は踏襲され発展したが、具体性が捨象された観念的な人間の描き方になりがちだったこと、また諸芸能と境を接する演唱の果たした役割が小さくなくなったことを明らかにできた点で意義を有する。

研究成果の概要(英文)：This research project focuses on how the middle of North Song Dynasty's Ci lyrics after the Liu Yong period changed the scope of literary history. During this period, many scholar bureaucrats participated in the creation of Ci lyrics, and the intelligent YaCi rapidly increased in literary sophistication. This study spotlights three bureaucratic lyricists, Wang Guan, Kang Yuzhi and Chao Buzhi, called "Guan Liu, 'top of the Liu Yong's followers'", considers how they were judged, and isolated three points. The first concerns reputation. The three poets all famously had good or bad reputations, just like Liu Yong. The second point is their selection and development of Liu Yong rhetoric devices, though their own work lacks the level of sympathy and compassion of Liu Yong's for the lower class. The final point is that the three poets' own originality was actually performance for high officials. In other words, some YaCi were not only read but also performed works for scholar bureaucrats.

研究分野：中国文学 宋代韻文論

キーワード：宋词 冠柳 柳永 王観 晁補之 康与之

1. 研究開始当初の背景

研究代表者(松尾)は南宋末元初の詞論書『詞源』を研究してきた。概書の筆者は雅詞作者の最高峰の一人に数えられる張炎である。『詞源』各篇における文芸論を検討する過程において、詞と同時代に存在した他の歌辞文芸に対して厳しい非難がなされていること、宋一代における詞人評価の観点に変化していること、詩論も詞論も南宋の江湖派詩人(詞人)のために著されたことなどについて、宋代における詞を取り巻く状況を見渡しての詳考が必要だと感じていた。中唐に起こり、宋代に歌謡としては頂点に達した詞は、北宋の柳永、張先、蘇軾、周邦彦、南宋の辛棄疾、姜夔、吳文英、周密によって形式・内容ともに急速に雅化をすすめたが、宋末には新たな歌謡である散曲に座を譲り、明代以後は楽曲を失った。清代には詩よりも複雑な韻文の一体として再び注目を集め、民国時期には詞壇を形成するほどに盛行した。その際、北宋詞と南宋詞のいずれを評価するか、誰を典範とするかに異なる立場があったが、いずれにしても「雅詞でなければならぬ」とする前提に立っていた。雅詞発展については、村上哲見氏が『宋詞研究』唐五代北宋篇および南宋篇の二冊によって、北宋中期に詞が士大夫の手にわたり、南宋の辛棄疾によって集大成されるとともに題材の拡大などが行われ、それを起点として士大夫層へ一層浸透したこと、また南宋中期以後は極度に洗練をすすめた専門文人というもう一つの流れがあったことを明らかにしている。

このように雅詞が発展するにつれ、慢詞の創始者である柳永には常に毀誉褒貶が寄せられた。非難としては、花柳界にもてはやされた破戒的人物であったこと、その詞が口語を交え、男女の情をあらわに歌うことも辞さないことなどがある。だが柳永こそが音楽面で詞を短編から長編の歌謡へと成長させ、内容にも長編であればこそ展開できる物語性をもたせ、表現においては詩の技法を応用するなど、楽人とも交流しつつ全面的に革新して詞を盛行へと導いたのである。柳永研究は村上哲見氏や宇野直人氏をはじめとして従来から少なくなく、詞人研究としては蘇軾と並んで最も多くの論点が提出されてきた。ことに宇野氏の『中国古典詩歌の手法と言語』に収録された、宋代に形成された演芸場や夜間外出解禁などの社会の変容との関連や、物語や話本との関係を指摘した諸論は新たな研究の視点を提供するものだった。

一方、演劇が未成熟だった宋代においては歌辞文芸が芸能の中心であり、それらは古くは王国維の『宋元戯曲考』に取り上げられ、近年では皇帝の大宴で雑劇をまじえて演唱された「楽語」研究が中華人民共和国で着手され議論されている。そして、上は唐代以来の大曲・法曲や転踏の上演から下は民間の諸宮調や纏令・纏達などの新たな芸能まで、これらの文芸に詞が含まれていることはこれまでも指摘されてきた。詞論における纏令非難はこのような背景においてなされたのである。

ただ、大曲・法曲は主として音楽研究の対象とされ、戯曲研究では元曲の前哨である宋代雑劇への関心が高く、それぞれの様式や分野に分断されがちであった。宋詞研究においても雅詞およびその作者が研究対象とされてきたことは先に述べたとおりである。そうしたなか、諸宮調では赤松紀彦氏他の『董解元西廂記諸宮調研究』に代表されるように詩文および詞曲の交流の側面が追及されており、中華人民共和国でも2000年代以降相互関係を考察した研究が見られるようになって、芸能研究の枠を越えようとしている。

そもそも宋代の詩話には酒席で詞を詠じた逸話が相当数収録され、詞もまた当時の社会において他の歌辞文芸同様に消費される文芸だったことを示している。そのことは、大詩人による堂々たる文学としての雅詞のほかに、流行歌謡としてそれなりの評価を得た数多くの詞が存在し、しかしその多くは記録されず、或いは失われたことを示しているといえる。そこで松尾は、南宋当時の流行を反映するとされる『花庵詞選』に収録された詞人の検討に取り組むこととし、蘇軾に見出された北宋の毛滂と、ごく初期の江湖派詩人と位置付けられる南宋の劉過の二人について検討を加えた。二人ともに出世しなかったが、詞には劉過では対話体、毛滂では薬名詩という伝統的な手法の奇抜な応用を指摘できた。ただ、彼らの場合、詞牌の種類は限定的で音楽に詳しくはなかったことが推察される。歌辞も、遊技的ともいえる機転のきいたものではあるが、芸術的に評価されたわけではない。しかし彼らのようにあまり注目されることのない士大夫階層の詞人たちが残した、芸術的完成度で言えば二流三流であったかもしれない作品群こそ、当時あっては歌謡としての詞の本流だったのではないかと。わけても音楽にも明るい『花庵詞選』の詞人たちを探究することなくしては、詞という文体の特質を十分にとらえることはできないのではないかと考えるに至った。

2. 研究の目的

松尾は、流行歌謡としての詞の生成と消滅とに関心を持つものである。巷間のその多くは記録されず、或いは失われ忘れられ、敦煌詞を除けば現在目にすることができる詞のほとんどは士大夫の手になるものである。しかしその中でも流行歌謡として評判をとった詞があることは、詩話などによって知られる。それらを分析考察することで、柳永から続く歌謡としての詞史を構築する手がかりが得られるのではないかと考える。

そこで、本研究では『花庵詞選』に収録され、柳永と併称された三人のマイナーポエットを取り上げた。『花庵詞選』は、当時一般の流行を反映した選択をしているといわれ、多数の詞人を広く収録する。その中に北宋後期の晁補之と王観、南宋初期の康与之がいる。晁補之は一般的には雅詞の作者と認められているが、元初の詞論書『詞源』はその詞を「冠柳」と称する。また王観には『冠柳集』という詞集があった(散佚)。原型は南宋末に成立したのではないかと推測さ

れている『両宋名賢小集』には、康与之は「柳永と目された」と記されている。従来の詞人研究は、文学史的に高い評価をうけている特定の詞人、あるいは蘇軾とその門人のように相互に人間関係のある詞人をひとつの創作集団として、研究の対象としてきた。王観・晁補之・康与之は柳永の余風を蒙って前後して創作活動をおこなったが、相互に人間関係があったわけではない。だが「冠柳」と称される以上、彼らの背後には柳永詞を範とした多数の詞人がいたはずである。本研究は、一人では取り上げるに足りない中小の官僚詩人と目される彼ら三人の作品を、柳永を軸にしてひとつのまとまりとして考察しようとするものである。

彼ら三人の作品の分析と考察とを通じて、洗練の度を急速に増した雅詞は歌謡としての詞に何をもたらしたのか、『花庵詞選』に見られる大衆性という詞の一つの本質が、士大夫たちによってどのように保たれたのか或いは保たれなかったのか、また大衆に喜ばれる条件は何だったのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、雅詞がどのように変化していったのかを考察する手がかりとして三人の冠柳詞人を対象とし、1年目に北宋の王観、2年目に南宋の康与之、3年目に北宋の晁補之と一人ずつ取り上げた。その際、その社会的活動、修辞技法、音楽的側面の三項目を共通して検討することで、それぞれの詞人の特徴を抽出するとともに、三人が柳永と並び称された理由を考察した。

分析にあたっては、三人の詞人それぞれについて以下三点の基礎調査を行った。

『花庵詞選』における選録作品と宋代編纂の類書における収録作品の確認

歴代の詞選集や詩話における収録作品の状況と変化の確認

宋代を中心にした筆記や類書における人物評や作品評の収集

彼ら三人は『花庵詞選』の詞人だが、そもそも『花庵詞選』は俗書と見なされてきたため日本での研究はあまり進んでいない。そこでまず『花庵詞選』及び編者の黄昇について調べ、該書に選録された作品を、従来指摘されてきた柳永詞の特徴と比較しながら通覧した。柳永についての研究は多数あり、一定程度進んでいる文体論的な特徴との対照が可能で、多くの示唆を得た。

次に各詞人の詞を分析するにあたって、宋から清までの各種詞選集の選録作品を表にしてその変遷を一覧できるようにするとともに、詩話に取り上げられた作品をチェックした。同時に

宋代の筆記や詩話に記録された彼らの人柄や作品への品評を可能な限り集めて分析した。その際には各筆記の著者の基本的な態度の違いにも配慮した。また話本や小説、類書に取り込まれた作品も対象とした。

上記の基礎調査と並行して、まず社会的活動の掘り起こしと整理に取り組んだ。晁補之以外の二人には、その生涯や作品の同定についてなお不明確な点が多々存在する。中華人民共和国における研究成果を整理してその妥当性について検討を加え、歴史書や地方志、同時代の人物の詩文集など、データベースも駆使して検索し、一方で三人と関係の深い人物の伝記や作品の調査も行った。そして、彼ら三人が士大夫社会においてどのように評価されたのか、また花柳界や隠遁者をはじめとする江湖とどのようにかかわったのかを考察した。

続いて各詞人の特徴を抽出した。歴代の詞選が共通して収録する代表作とみなせる詞を中心に精読した。また歴代の詩話や詞評がある詞については、評価の妥当性も検討した。その際には、構想として柳永詞の影響がなかったか、柳永の特徴と指摘される修辞法の何を選びどのように発展させているか、或いは柳永の特徴とされる事項で使用していないものはないかに注意した。音楽的技能は、詞曲が伝わらない現在では具体的な指摘は難しいが、詞牌の使用状況や詞律の分析、また演唱の記録などから間接的に考察を試みた。その際にはこれら各項の関連性に意を払った。

最後に、人物においても作品においても宋代の民間芸能や説唱文学との接触の有無や程度を考慮しつつ、士大夫社会での評価、つまり雅詞とみなされたか否か、どのような点はその評価を生んだのかを詞人ごとに分析した。

4. 研究成果

本研究では、北宋中期以後南宋初期までの詞がどのように変化していったのかを考察した。この時期、士大夫が本格的に創作に参加して、雅詞は洗練の度を急速に増していた。その雅詞成熟過程を文学史的視野のもとで検討するものである。具体的には、大衆性を有するとされる『花庵詞選』収録詞人の中から「冠柳」と称された三人の官僚詞人、王観・康与之・晁補之を対象とし、社会的活動と評価、修辞技法、特に卑俗と非難された柳永詞の修辞法及び作品の受容の状況、音楽的側面の三点から検討した。

具体的には以下の三点を共通点として抽出できた。

(1) 王観における「逐客」事件、晁補之が蘇軾から受けた賞賛、康与之における「秦檜の狎客」という悪評、三人ともに褒貶は異なっても耳目を集めたエピソードが語られ続けたこと。三人はいずれも官途の途中で失脚して晩年は不遇だったが、士大夫社会に生き、その交遊の中で詞を作った。彼らのような士大夫にとって、名を知られながら中央政界とは無縁に終わった柳永は自己投影しやすい詞人だっただろう。

(2) 柳永に先蹤を見いだすことができる修辞法の選択とその展開が各詩人の評価要素となること。すなわち典故・対句・相関語や連環句・口語語彙の使用に柳永詞の影響は明らかであるし、寿詞や閨怨といった主題も継承する。しかし、その作品からは柳永詞のような社会の底辺に生き

る人々への同情や共感が欠落しており、そのぶん士大夫社会から非難を受けることのない雅詞となったといえる。

(3) 王観における寿詞「減字木蘭花」十首の組歌、晁補之における大宴の軼踏「調笑」、康与之における応制詞、異なる様式ではあるがいずれも演唱されたものであり、彼らは音楽面で有能で、人々の称賛を受けたといえる。北宋後期から南宋にかけて、民間芸能で人気を博した諸宮調や鼓子詞などの歌謡の制作を試みる士大夫があったが、彼ら三人のそれは、町の演芸場で上演される類の詞ではなく、士大夫のための歌舞であった。士大夫社会でも読む文学ではなく聞き・見るエンターテインメントとしての詞の需要が小さくなくなったといえる。

個々の意識と実践については個別の論文として発表した。以下、年度別に研究成果の概要を記す。

○2018年度

まず『花庵詞選』の編者である黄昇の詞集『散華庵詞』の四庫全書総目提要の訳注を「詞籍「提要」訳注稿(八)」(『風絮』第15号)に掲載し、黄昇が南宋・理宗朝の福建省泉州の人であって官途につかなかったこと、南宋末の代表的詩論書『詩人玉屑』の著者である福建省建安の魏慶之と親交があったことを述べた。魏慶之は科挙に落第したのち菊を植えて隠遁した人物であり、黄昇もまた同様であった可能性が高い。すなわち黄昇は、出版の中心地の一つであった建安とも関係を有する、江湖派詩人の一人であり、『花庵詞選』が当時の流行を反映するものであることは、編者の黄昇が高級官僚でも専門文人でもなく、市民階級の詩人であることによって裏付けられる。

初年度に発表を準備していた王観については、翌年の台湾訪書によって資料を確認したのち、「王観の詞について - 冠柳の視点から - 」(『風絮』第16号)及び研究ノート「詞の輯録 - 王観を例として - 」(『東海学園大学研究紀要・人文科学研究編』第25号)として発表した。

「王観の詞について」では、長い伝統を有する模擬詩を詞で試みるという新機軸が代表作に見られることを指摘し、修辞法では典故の使用や擬人法、巧みな対句、同字の繰り返しによる連環句、口語語彙の使用といった柳永詞の特徴を多く襲いながらも、柳永が士大夫社会から非難されることになった露骨な「語り」は用いず、柳永詞に指摘される現実に根差した具体性は捨象され、士大夫としての節度を保ったものとなったと結論した。また明代の類書『詩淵』から補輯された十二首がすべて寿詞であり、かつそのうち一首は徽宗朝以前に伝わったとされる『高麗史』『樂志』に含まれていること、また詞牌「減字木蘭花」の十首は組曲形式(連作)であった可能性が高く、芸能にあった組曲形式を取り入れた斬新なものであることを指摘した。柳永の寿詞を発展させて士大夫に歓迎され、以後の寿詞の流行にともなって長く王観の詞が流行していたことが推測できる。この点については論文公刊後、元曲の作者の記録である『録鬼簿』に冠柳詞が和陶詩と対句で用いられているとの教示を得、報告書作成を機会に追記して推測を補強した。

「詞の輯録」では、詩集が散逸して久しい王観詞の収集が始まった清・冒広生『冒氏叢書』から、中華民国の劉毓盤『唐五代宋遼金元名家詞六十種』、趙万里『校輯唐宋遼金元人詞』、唐圭璋の初編本『全宋词』、中華人民共和国になってから唐氏と王仲聞との協力によって成った再編本『全宋词』までの収集作業と議論を追跡した。詩文集、筆記、白話文献など、資料をどこまで拡大し、どのような態度で取舍するかなど、王観詞の作品同定のための調査であったが、清末から民国時期にかけての詞学及び書誌学の動向をうかがうものとなった。

○2019年度

二年目は康与之に重点をおいた。成果は「康与之の生涯と作品編年試探」(『日本宋代文学会会報』第7号)及び「康与之の詞について」(『風絮』第17号)として公刊した。また康与之と詞の贈答があった蘇庠および韓玉について調査は、蘇庠は「龍榆生編選『唐宋名家詞選』訳注稿(十三)」(『風絮』第15号)に、韓玉は彼の詞集『東浦詞』の四庫全書総目提要の訳注として「詞籍「提要」訳注稿(十)」(『風絮』第17号)に掲載した。

「康与之の生涯と作品編年試探」では、康与之の伝記を追いつつ時代背景とともに作品の編年の可能性を探った。康与之は奸臣秦檜派官僚であって評判が非常に悪い。先行する数篇の伝記研究論文においても意見の不一致は少なくなく作品編年の試みも無いため、そこから着手した。その結果、詩話や碑文・地方志によって、また制作の背景となった出来事や韓玉など交流のあった人物の作品や伝記を傍証にして、数篇を編年できた。これによって、北宋滅亡後数年の悲憤慷慨の懷古詞、高宗に仕えた時期の華麗な応制詞、外任宮觀時に作った詩文、晩年に士大夫との交遊で見せた達観といった作風の変化を明らかにできた。

「康与之の詞について」では、歴代の詞選に収録された応制詞と閨怨詞とを考察の対象とした。応制詞では詞律の秀逸さと、対句及び典故の多用とによって格調と華麗さを演出したことを、閨怨詞では文脈の不整合がみられることもあるが習見の典故と相関語や代言体の使用など分かりやすい趣向が優先されて、異なる作風であることを指摘した。しかしそのいずれにもみられる当意即妙の作詞ぶりとして述べてくさんとする賦的表現は柳永の後継というにふさわしく、共有して楽しむ歌謡として作られたと推論した。

○2020年度

三年目は晁補之を対象とした。成果は「晁補之の調笑をめぐって」(『東海学園大学研究紀要・人文科学研究編』第26号)として公刊した。南宋初期の詞選集『樂府雅詞』に収録された彼の軼踏「調笑」を櫟栝と集句、典故の視点から分析した。学者でもあった晁補之は、博識に裏打ちされた典故によって雅化を進めた。一方、蘇軾が開発した櫟栝詞や王安石が始めた集句詞を制作

する際には、中晩唐詩や北宋詩詞を用いている。それらに見られる平易な表現と叙情性とは彼の詞の特質でもある。転踏は詩詞を一組とする連作の歌舞であって、このような晁補之詞の平易な表現と音楽性の高さは柳永に通じるものと認められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 17
2. 論文標題 康与之の詞について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 風絮	6. 最初と最後の頁 37-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 7
2. 論文標題 康与之の生涯と作品編年試探	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本宋代文学学会会報	6. 最初と最後の頁 50-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 26
2. 論文標題 晁補之の調笑をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海学園大学研究紀要・人文科学研究編	6. 最初と最後の頁 31-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 17
2. 論文標題 詞籍「提要」訳注稿（十）「東浦詞」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 風絮	6. 最初と最後の頁 143-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 17
2. 論文標題 龍榆生編選『唐宋名家詞選』訳注稿(十五)李清照伝記集評	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 風絮	6. 最初と最後の頁 207-213
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 16
2. 論文標題 王観の詞について 冠柳の視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 風絮	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 25
2. 論文標題 詞の輯録 王観を例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海学園大学研究紀要・人文科学研究編	6. 最初と最後の頁 75-85
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 16
2. 論文標題 龍榆生編選『唐宋名家詞選』訳注稿(十四)李甲「帝台春」伝記	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 風絮	6. 最初と最後の頁 137-145
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 15
2. 論文標題 詞籍「提要」訳注稿(八)「散花庵詞」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 風絮	6. 最初と最後の頁 123 - 133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾肇子	4. 巻 15
2. 論文標題 龍榆生編選『唐宋名家詞選』訳注稿(十三)蘇庠「菩薩蠻」「木蘭花」伝記	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 風絮	6. 最初と最後の頁 172 - 183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 松尾肇子
2. 発表標題 康与之作品編年試探
3. 学会等名 日本宋代文学學會
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------